

藤川 朋伽

FUJIKAWA Tomoka

『ゲーロ写本』研究 ―「聖墳墓参り」挿絵を中心に―

A Study of The *Gero Codex*: Focusing on the Image of “Women at the Tomb”

美術史領域

序章

本論文で取り上げる『ゲーロ写本』は970年頃、ケルン大司教ゲーロ（Gero von Köln）の依頼により、ライヒェナウ（現ドイツ）の修道士アンノーによって制作された福音書抄本である。オットー朝期、特に10世紀半ばから11世紀初頭のライヒェナウでは、高位聖職者や皇帝たちの依頼により、盛んに彩飾写本制作が行われていた。その作品群の中でも、『ゲーロ写本』は人物像挿絵を含む彩飾写本としては現存最古の作例である。彩飾の内容として、冒頭に福音書記者像、栄光のキリスト、献呈図の挿絵が7点連続しているほか、本文中には「聖墳墓参り」を含む多数のイニシアル装飾が含まれる。

本研究の目的は、『ゲーロ写本』の「聖墳墓参り」挿絵に焦点を当て、その表現上の特徴を整理するとともに制作背景を考察し、従来の『ゲーロ写本』評価を再検討することである。

先行研究では、挿絵がカロリング朝期

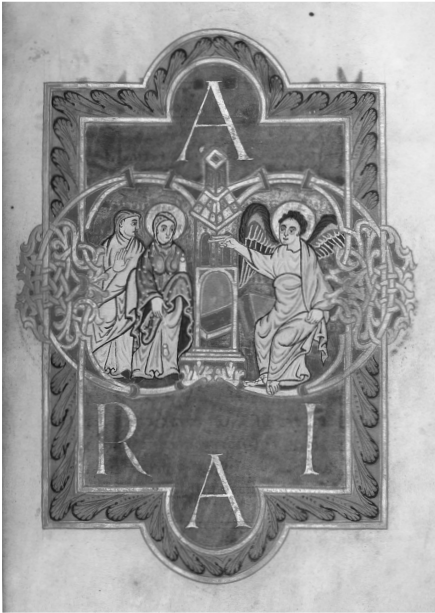


図1『ゲーロ写本』「イニシアル装飾M（聖墳墓参り）」ライヒェナウ 970年頃 29.7×22.2cm ダルムシュタット、大学・州立図書館 Hs. 1948, fol. 86r. [図版引用典拠：Universitäts- und Landesbibliothek Darmstadt, TU digit: http://tudigit.ulb.tudarmstadt.de/show/Hs-1948/0172(最終アクセス:2023年6月12日)]

の図像を引用して描かれている点が特に注目され、本作は主にオットー朝初期の芸術活動がカロリング朝期の作品の模倣から開始されたことを示す作例として捉えられてきた。

しかし、『ゲーロ写本』「聖墳墓参り」挿絵（図1）は、主題選択と表現方法において特徴的であり、さらなる検討を要するものである。「聖墳墓参り」はキリストの復活にまつわるエピソードの一つで、本作品中唯一のキリスト伝挿絵である。このように福音書抄本の彩飾としてキリスト伝の挿絵を1点のみ含める場合、通常は「磔刑」場面が選択されることが多い。復活にまつわる「聖墳墓参り」もキリスト教にとって重要な主題ではあるものの、「聖墳墓参り」のみを取り上げて挿絵化する例は極めて稀である。さらに、「聖墳墓参り」自体の表現方法としても、文字の形を墓の建築物として表現するタイプのイニシアル装飾は、先行する時代や、同時代の作例にも見られない特殊なものである。本論文では「聖墳墓参り」の特徴を改めて整理するとともに、その主題選択の背景について考察を行った。

第1章 『ゲーロ写本』とその先行研究

ライヒェナウでは8世紀初頭に修道院が創設され、8世紀半ばには写本制作が開始されたとみられる。当初の写本はいくつかのイニシアル装飾を含む程度で、比較的単純なものであった。しかし10世紀半ばには『ゲーロ写本』のような豪華な彩飾写本制作が行われるようになり、皇帝や高位聖職者のための彩飾写本が盛んに制作された。しかし、現在それらの写本はドイツ国内外に散逸しており、19世紀末の研究開始当初は制作地の帰属を明らかにすることに主眼が置かれていた。20世紀半ばにはそもそもライヒェナウで重要な写本制作は行われていなかったとする見解が登場したが、1990年頃には典礼学や古写本学の観点からも検討が行われ、現在では制作が行われていたとする考えが主流となってい

る。ただし、最近では完全にライヒェナウという場所で、ライヒェナウの修道士によってのみ制作が行われていたというより、他の修道院や修道士の参与があった可能性を含めた多角的な検討が求められている。

『ゲーロ写本』はこのような背景をもつライヒェナウにおいて制作された彩飾写本であり、その制作地の帰属や評価は多少揺れ動いてきた。従来の研究においては主に福音書記者像や栄光のキリスト、献呈図の挿絵が注目された。特に福音書記者像や栄光のキリストはカロリング朝期の写本挿絵の図像を引用しており、カロリング朝とオットー朝の中間を示す、初期のオットー朝美術の重要な作例として評価された。近年は「献呈図」のサイクルや、ライヒェナウでは現存最古の豪華な彩飾写本作例である点が注目されているように見受けられる。しかしながら、特徴的な「聖墳墓参り」挿絵については、他の挿絵と比較してほとんど検討がなされてきていない。

第2章 ヨーロッパ初期中世の「聖墳墓参り」図像

「聖墳墓参り」とはキリストの復活にまつわるエピソードのひとつで、磔刑後の日曜の早朝、遺体に塗るための香料を持って墓を訪れた女性たちに対して、天使がキリストの復活を告げるというものである。これは四福音書や新約聖書外典にも記述されるものの、それぞれ細かい部分には差異があることから、図像にも多少の揺れがみられる。基本的には、墓の前に坐す天使、墓あるいは空の石棺、番兵、遺体を包んでいた亜麻布や頭布などが描写される。場合によっては、女性たちや天使の人数の変化、番兵や亜麻布の描写の省略がみられ、墓の形にもバリエーションがある。

すでに4-5世紀には女性たちと天使、墓あるいは石棺という典型的な図像が登場しており、初期中世を通して多数の作例がみられる。写本挿絵としては、カロリング朝の作例でテキストの余白部分に

描かれたものや、イニシアル内部の空間に描かれた作例がある。一方、ライヒェナウの他の作例では、基本的に1ページ全体を用いて「聖墳墓参り」の挿絵が描かれており、右側に天使、左側に女性たちが配置される構成が共通している。しかし、女性の数や石棺の形状と位置、建築物の有無といった点についてはバリエーションがみられる。

それらに対し、『ゲーロ写本』では「聖墳墓参り」の場面をMの文字と融合させて描いており、これは当時類を見ない特殊な表現である。ここではMが画面中央に大きく描かれ、文字の形そのものや、内部の空間に聖墳墓参りの挿絵が描かれている。左側には女性が2人いて、右側には天使が1人坐す。天使は女性たちへ右手を差し出し、キリストの復活を告げている。Mの文字の中心部分は墓の形になっており、そのアーチの向こう側には空の石棺が垣間見える。『ゲーロ写本』の表現は、イニシアル内部に図像を組み込むものとしてはカロリング朝の先行する作例があるものの、文字の形そのものを建築物として表現した例は他になく、ライヒェナウの作例としても独特な表現が行われているといえる。

第3章 主題選択の背景

本章では『ゲーロ写本』で特殊な主題選択が行われた背景について、2つの観点から考察を行った。

ひとつは注文主ゲーロの影響である。ゲーロは皇帝の妃となる女性を迎える使者としてビザンティンに赴いており、その際東方から聖遺物を持ち帰っている。また、ゲーロは等身大の木彫磔刑像の制作を依頼している。このキリスト像は瞑目し、両手に打ち込まれた釘を支点として腕が伸びて、胸元には引き攀れたような皺ができ、膝が屈折して脱力きった姿で表される。開眼しほぼ直立しているような生きた姿ではなく、「死せるキリスト」として表現されている磔刑像は、当時のヨーロッパ西方では珍しいものであった。一方、東方では比較的早い時期

にこの種の表現が行われていた。ゲーロは東方の文化と接する機会が同時代の西方の人物としては多く、西方には広まっていない芸術に触れる機会があったとみられる。西方では珍しい磔刑像を作らせることができたような環境では、前例のない『ゲーロ写本』のような作品を制作させることも可能であったのではないだろうか。

もうひとつは、ライヒェナウ周辺地域で行われていた、復活祭の典礼劇の影響である。典礼劇とは、典礼の中で聖職者によって教会内で演じられていたラテン語の対話あるいはそのテキストを指すもので、大半が降誕あるいは復活を主題としている。復活祭では様々な典礼が行われるが、その中で金曜に磔刑像や特別な聖遺物を疑似的に埋葬し、日曜の早朝に取り出して元の場所へ戻す儀式がある。この日曜の朝行われる儀式の中で、墓を訪ねる3人の女性が、天使にキリストの復活を告げられるという内容の短い対話が典礼劇として行われる。9-10世紀頃には、ライヒェナウ周辺でこの儀式が行われるようになっていた。

近隣のザンクト・ガレンでは、典礼劇で唱えられる言葉を記した、西方でも最初期の写本作例が残されている。10世紀には聖墳墓礼拝堂が建立され、キリストの血の聖遺物を用いた典礼劇が行われていた。さらに、コンスタンツでは10世紀半ばには円形の礼拝堂が建立され、エルサレムの聖墳墓教会を模した建築物が作られ、典礼劇が行われた。そしてライヒェナウでは、925年にキリストの血の聖遺物がもたらされたことをきっかけに円形の礼拝堂が建立され、典礼劇が行われたとみられる。このように、10世紀後半のライヒェナウ周辺では、復活祭の典礼劇が隆盛し始めていた。キリストの復活をより現実的で、実感しやすい形で求める傾向があったことから、「聖墳墓参り」の視覚化がひととき重要視された可能性がある。

終章

従来、『ゲーロ写本』はライヒェナウにおける現存最古の豪華な彩飾写本作例である点や、福音書記者像や献呈図などカロリング朝の写本を典拠とした挿絵が含まれているという点で注目されてきた。しかし、これらは写本が使用される文脈からは切り離された検討であったように見受けられる。本作の「聖墳墓参り」表現は、制作当時の宗教的な事情をも含めて捉えることができ、このような典礼用写本としての意義を踏まえた包括的な検討を行うことも必要ではないだろうか。

さらに、『ゲーロ写本』が制作された後、ライヒェナウではキリスト伝挿絵を多数含む、豪華な福音書抄本が複数制作された。本作はそれらの福音書抄本制作の先駆的な例としても重要である。『ゲーロ写本』はキリスト伝挿絵がどのように福音書抄本に取り込まれるようになったのかという、ライヒェナウおよびオットー朝の写本制作の様相を推察し得る重要な作品であり、今後同時代の写本研究を進めるにあたってさらに検討する意義のある作品であると考えられる。

主要参考文献Adolf Schmidt, Die Miniaturen des Gerokodex. Ein Reichenauer Evangelistar des 10. Jahrhunderts. Handschrift 1948 der Landesbibliothek zu Darmstadt. Leipzig: Germany. K. W. Hiersemann, 1924. Albert Boeckler, “Die Reichenauer Buchmalerei,” Die Kultur der Abtei Reichenau. Erinnerungsschrift zur zwölfhundertsten Wiederkehr des Gründungjahres des Inselklosters 724–1924, Bd. 2, München: Verlag der Münchener Drucke, 1925, pp. 956–998. Peter Bloch, “Das Reichenauer Einzelblatt mit den Frauen am Grabe im Hessischen Landesmuseum Darmstadt,” Kunst in Hessen und am Mittelrhein, Hessisches Landesmuseum Darmstadt, Bd. 3, 1963, pp. 24–43. Henry Mayr-Harting, Ottonian Book Illumination: an Historical Study, 2nd Revised edition, London: Harvey Miller, 1999. Michael Gosmann & 10 more, Der Gero Codex kehrt zurück. Das gemalte Buch von Wedinghausen: Dokumentationsband über die Ausstellung Arnsberg, 24.10.2009–17.01.2010, Stadt Arnsberg, 2010. Walter Berschin, Ulrich Kuder, Reichenauer Buchmalerei 850–1070, Wiesbaden: Reichert Verlag, 2015.